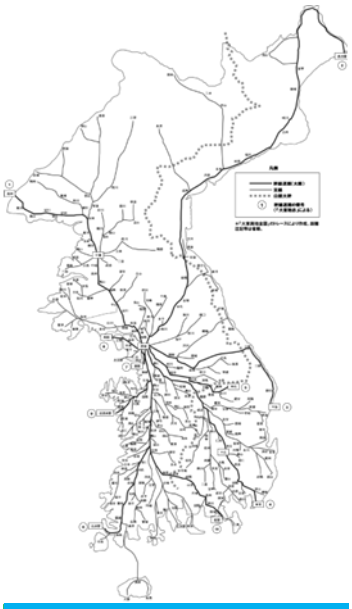
轟 博志 教授

韓国における古道の復原と観光地域づくりへの応用

ライフワークは「道」です。特に、韓国の「道」です。小さいころから、道歩きが大好きでした。ソウルの大学院に留学した時は、韓国の祭りの文化地理学的研究をしようと考えていました。しかし韓国にも日本の五街道のような古道があることと、それがあまり研究されていないことを知り、古道研究に鞍替えしました。朝鮮王朝時代の１０路線の街道は、北朝鮮区間以外は全部歩きました。

10路線の復原を通じて、歴史地理学の立場からの、古道の復原の手法も確立していきました。簡単に言えば、まず史料などを通じて経由地点の復原をします。これを「点の復原」といいます。次に古地図や現代の地形図を通じて、具体的な経路を復原します。これを「線の復原」といいます。最後に地籍図や空中写真、現地の景観観察や聞き取り調査、考古資料などを突き合わせて、細かな線形や周囲の地形との関係、都市計画との関係などを考察します。これを「面の復原」といいます。このように点～線～面の連携（次元の連携）、歴史学～地理学～考古学の連携（学際的連携）、マクロスケール～メソスケール～ミクロスケールの連携（スケールの連携）と、道路一つに対して、多面的な検討を試みるのです。さらに歴史的・地理的背景の共通点や差異点のある日本や中国等とも比較する、国際的な視野での検討も有効です。



朝鮮王朝時代の駅路網

さらには、朝鮮時代の学者たちの、道路に対する思想的な研究もするようになりました。朝鮮王朝時代の文献には「山川道里」という言葉が頻出します。多くの地誌や地図が、原則として山と川と道路と都市だけの描写で構成されています。山は自然地理の代表です。道路は人文地理の代表です。川は自然でもあり、水運を考えれば人文でもあります。これら三つの要素が有機的に絡み合いつつ、全国の都市と結合することで、朝鮮という国土を、王の支配する領域を、見事に表しているのです。

APUに来てからは、韓国で培った古道研究を、学生の国際交流や観光地域づくりなどに還元することを考えるようになりました。ソウルから江戸城まで、朝鮮通信使が歩いた道を、両国の大学生と歩いたりもしました。またAPUは地元大分の地域づくりにも力を入れているので、大分の古道を復原し、学生や地元とともに道を再整備し、イベントを行う等の活動もしています。一つ一つの集落には集客力がなくても、「道」という共通した歴史的・文化的アイデンティティを介して連携することで、魅力的な観光資源になる可能性が開けます。中山道や熊野古道は代表的な例ですね。古道のない地方はありませんから、観光資源を「持たざる地域」にとっては、強力な援軍なのです。研究したことが実践の場で生きるのはうれしいことです。

日田の地図

今は新羅の古代道路の復原に挑戦しています。韓国の研究者からも「史料がないから絶対無理」と言われていますが、「無理」だからこそライフワークになるのだと思い、日々研究しています。

高麗大学校とのフィールドワークの様子

日田往還中津街道

学部

サステイナビリティ観光学部

研究分野

地理学、地域研究、人文地理学

アドレス

hstod@apu.ac.jp